

文主語構文について

景山弘幸

0. はじめに

英語には、(1)のような文頭位置に *that* 節が生ずる、いわゆる文主語構文 (sentential subject constructions) が存在する。

- (1) a. That Bill knows German thoroughly is obvious to all.
 b. That there are porcupines in our basement makes sense to me. 安井編

しかしながら、文主語構文には興味深い統語的特徴が見られる。文主語構文は、そのままの形では疑問化しにくい。従来、しばしばその知的意味 (cognitive meaning) が同じとされることから互いに関連付けられてきた外置構文 (extraposed constructions) では問題ない。例文 (2) (3) (4) 参照。

- (2) a. *Is that John left significant?
 b. Is it significant that John left? Grosu & Thompson
- (3) a. *What does that he will come prove?
 b. What does it prove that he will come? Koster
- (4) a. *How significant is that John left?
 b. How significant is it that John left? G & T

実は疑問文ばかりでなく、感嘆文の場合にも同じ現象を呈する。例文 (5) 参照。

- (5) a. *How strange that the children are so quiet is!
 b. How strange it is that the children are so quiet! Quirk et al.

さらに、文主語構文は埋め込み (embedding) と相性がわるいが外置構文では問題ない。例文 (6) 参照。

- (6) a. *Though that Bill knows German thoroughly is obvious to all, they are still worried about his going to Germany alone.
 b. Though it is obvious to all that Bill knows German thoroughly, they are still worried about his going to Germany alone. 安井編

これらの事実から文主語構文は外置構文と違って、他の統語的操作とは両立しにくい構文であると言える。

以下、1節では文主語構文に関する過去の研究を概観し、文主語構文の特性を整理する。2節

では、文主語構文は情報構造上の要請で成立していることを示す。3節では、文主語構文が他の統語的操作と相入れないことを説明する方向を探る。

1. 0 過去の研究

過去の研究としては Rosenbaum (1967), Emonds (1976), Hooper & Thompson (1973), Culicover (1976), Marantz (1979), Grosu & Thompson (1977), Kuno (1973), Koster (1978), Delahunty (1983), 中右 (1983) などの研究がある。議論の中心は (a) 文頭の that 節が主語位置にあるのか否か, (b) いかにしてこの構文をいわゆる外置構文と関連づけるか, または, (c) 文主語構文についての意味的機能的観点からの研究であった。これらの研究で述べられてきたことをまとめておく。

- A. that 節は topic 位置にある。 (Koster)
- that 節は主語位置にある。 (Delahunty)
- B. 文主語構文と外置構文は完全に交替可能ではない。
- C. 文主語は既定的命題であり, 文全体は叙述文である。(中右)

Aについては依って立つ文法理論内の問題なのでここでは扱わない。Cについては 1. 2節でやや詳しく述べる。Bについては, 次の事実が知られている。(7)のように文主語構文と外置構文が交替可能な場合がある一方で (8)のように外置構文しか許されない場合がある。

- (7) a. That the world is flat $\left\{ \begin{array}{l} \text{surprises me.} \\ \text{is obvious.} \\ \text{turns out to be true.} \\ \text{proves nothing.} \end{array} \right\}$
- b. It $\left\{ \begin{array}{l} \text{surprises me} \\ \text{is obvious} \\ \text{turns out to be true} \\ \text{proves nothing} \end{array} \right\}$ that the world is flat.
- (8) a. *That the world is flat $\left\{ \begin{array}{l} \text{seems.} \\ \text{happens.} \\ \text{turns out.} \\ \text{appears.} \end{array} \right\}$
- b. It $\left\{ \begin{array}{l} \text{seem} \\ \text{happens} \\ \text{turns out} \\ \text{appears} \end{array} \right\}$ that the world is flat.

さらに (9)のような文主語構文しか許されないものもある。(9)の例は双補文動詞構文 (bisentential verb constructions) と呼ばれる。

- (9) a. That the world is flat $\left\{ \begin{array}{l} \text{proves} \\ \text{implies} \\ \text{guarantees} \\ \text{suggest} \\ \text{means} \\ \text{indicates} \end{array} \right\}$ that Galileo was a genius.

b. *It {

- proves
- implies
- guarantees
- suggests
- means
- indicates

 } that Galileo was a genius that the world is flat.
 (7)~(9) Culicover

(8) の容認度の違いは、いわゆる「文末重心の原理 (end-weight principle)」(Quirk et al. 1985) で説明されることがある。重い要素が文末にきている (8b) はよいが、文頭が重い (8a) はよくないというわけである。

文末重心の原理：長く重い要素は文末に置かれる。 (Quirk et al.)

文主語構文に関しても同様の指摘が Grosu & Thompson (1977) でなされている。

The acceptability of sentences with non-final heavy constituents other than NP clauses improves substantially when the weight of the following clause-mates is increased; i.e., what seems to matter in the first place is the RELATIVE, rather than the ABSOLUTE, weight of such phrases. G & T p. 145

文末重心の原理に従えば、(7) では外置構文 (7b) の方が「無標 (unmarked)」, 文主語構文 (7a) は「有標 (marked)」ということになる。しかし、(8) と違って、(7) で文主語構文が文末重心の原理に関して有標といえども、文全体は完全に容認可能であること、さらに (9) のように文主語構文しか許されないものがあることから、文主語構文には独自の存在理由があると考えられる。

1. 1 述語動詞のタイプ

Kiparsky-Kiparsky (1970) では、叙実的前提 (factive presupposition) を依り処として叙実述語 (factive predicate) のみ随意的に文主語をとるとしている。。しかし (10b) が示すように非叙実述語 (nonfactive predicate) の *probable* も文主語をとることができるのでこれは正しくない。

- (10)a. That the match was canceled is surprising. <factive>
- b. That the match was canceled is highly probable. <nonfactive>

また、Hooper (1975) では断定 (assertion) という概念を用いて、弱断定述語 (weak assertive predicate) のみ文主語をとれないとしている。この観察は正しい。

- (11)a. That Pancho will forfeit the match is not likely. <nonassertive>
- b. That Pancho will forfeit the match is certain. <strong assertive>
- c. *That Pancho will forfeit the match seems/appears. <weak assertive>

しかし、weak assertive でなければどんなタイプの述語でも文主語をとれるかということそうではなくある程度種類が限られている。

- (12)a. That the world is flat is obvious.
 b. That the world is flat turns out to be true.
 c. That the world is flat proves nothing. Culicover
- (13)a. That he is happy is widely believed.
 b. That Smith had arrived was reported by the UPI. 中右
 c. That Bill might be in danger has been called to attention of the people responsible for his behavior. G & T
- (14) That his fingerprints were on my throat proves that he is unfond of me. 安井編
- (15)a. That the world is flat surprises me.
 b. That the world is flat came as a great surprise.
 c. That John left is believed to have upset you.

注目すべき特徴は、(12a) では連辞 (copula) としての be 動詞、(12b) の *turns out*、(12c) の *prove* は連辞的動詞 (copulative verb)、すなわち内在的に be 動詞を含むものが現れていることである。また (13) の受動文も be 動詞を含む事に変わりはない。また (14) の双補文動詞もすべて「～であることを～する」という意味を持つので連辞的 be 動詞を内在的に含む動詞である。(15) はいわゆる心理動詞 (psych verb) である。心理動詞と be 動詞の関係を考えてみる。例えば *annoy* は (to be a source of annoyance) という意味を持つ。また心理動詞は be 動詞+形容詞で言い替えることが可能である。例文 (16) 参照。このことから心理動詞も be 動詞を内在的に含む動詞といえる。

- (16)a. That the Republican Party is more corrupt annoyed Harry.
 b. That the Republican Party is more corrupt was annoying to Harry.
 (中右)

従って、文主語構文に現れる述語動詞は be 動詞+predicate, または連辞的 be 動詞を内在的に含む動詞ということになる。

文主語構文に現れる述語動詞：be 動詞+predicate, または連辞的 be 動詞を内在的に含む動詞。ただし弱断定述語は除く。

ここで注意したいのは連辞的でない単独の be 動詞は文主語をとれない。例文 (17)。

- (17) *That the world is flat is.

あくまでも predicate を伴う連辞的 be でなければならない。

1. 2 叙述文であるということ

中右 (1983) において文主語が叙述の対象であり、文主語構文は全体として叙述文であること

が示された。以下、中右の議論を概略する。叙述に対する概念は提示である。文主語に限らず主語は一般に叙述されるか提示されるかのいずれかである。述語動詞にも叙述型と提示型がある。文主語構文に現れる述語動詞は叙述型であることから文頭の *that* 節は叙述の対象としてふさわしい既定的命題ということになる。既定的とは次のように定義される。

ある事柄の知識（概念、命題）が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識のなかにあるとき、その知識は既定的である。 中右

外置構文の場合には、文末の *that* 節は既定的・非既定的のいずれかとして一義的に決る場合 (18) と曖昧な場合 (19) がある。

- (18)a. It is believed that he is happy.
 b. *That he is happy is believed.
- (19)a. It is widely believed that he is a spy.
 b. That he is a spy is widely believed.

(18b) が非文なのは *that* 節が非既定的命題、つまり主張であるからである。一方、(19a) は、(19b) が可能なことからその *that* 節が既定的命題の読みを持つ場合と、(18a) と同じく非既定的命題の読みを持つ場合に関して曖昧である。

1.1 節でみた文主語構文の述語動詞のタイプが連辞的 *be* 動詞、つまり *be*+*predicate* であるのは文主語構文が叙述文であるからに他ならない。また単独の *be* や *seem* が文主語をとれないのはそれ自体に叙述能力がなく、*predicate* を従えて初めて叙述型の動詞と見なせるからである。

叙述という観点が必要なことは、文主語をもつ受動文を見ても確認できる。(20) が示すように叙述性の高い受動文しか適格とならない。(20b) では *widely* という副詞がまた (20d) では *by everybody in the town* が高い叙述性を保障している。

- (20)a. *That he is happy is believed.
 b. That he is happy is widely believed.
 c. *That she slipped arsenic into his tea is said.
 d. That she slipped arsenic into his tea is said by everybody in the town.
- 中右

このことは文主語だけではなく擬似受動文にも見られることが高見 (1993) で述べられている。高見によれば擬似受動文は (21b) のように主語が「特徴付けられれば」容認可能になるのである。

- (21)a. *The U.S. has been lived in by John.
 b. The U.S. has been lived in by generations of immigrants.
- 高見

Bolinger (1977) では、(22) の文に関し、文主語はその動詞の情報価値が高まれば容認出来ると述べている。

- (22) a. *That the president has been indicted will be announced.
 b. That the president has been indicted will not be announced.
 c. That the president has been indicted will be loudly proclaimed.

Bolinger

If the information value of the verb is increased, extraposition is not necessary.

So it appears that semantic weight, and not the 'knownness' of the content of the clause, is what forces extraposition and with it the addition of *it*.

Bolinger p. 74

中右の説明では、通例提示機能を持つ動詞の受動文も叙述性が高まれば文主語構文をとれるということになる。動詞 *announce* や *proclaim* は新たな話題を導入する提示型の動詞なので叙述文としての文主語構文には現れない。例文 (22a)。しかし (22b), (22c) のように否定辞 *not* や副詞 *loudly* が加えられることによって叙述文となりうる。

心理動詞については前節で述べたように *be* 動詞の要素を内在的に持っていること、また心理動詞はある対象に対する情緒的反応を表すので叙述型の動詞と見なせる。

中右はまた、文主語構文が叙述文であることから文主語内でいわゆる主節現象が生じないことを説明した。主節現象は非既定的命題にしか起こらない。叙述の対象である既定的な文主語内で主節現象が起きないのは自然なことである。

- (23) a. *That never in his life has he had to borrow money is true.
 b. *That over the entrance should you hand the gargoyle was written in the plans.
 c. *That plying in tomorrow's concert will the Arthur Rubinstein is certain.

Hooper & Thompson

心理動詞の場合も同じである。

- (24) *That even more corrupt is the Republican Party annoyed Harry.

中右

以上、1. 1 節でみた述語動詞のタイプの背景にあるのは文主語構文が（既定的命題＋それに対する叙述）という構文上の特性であることが確認できた。しかし叙述文であるということだけでは文主語構文を完全に捉えたことにはならない。中右自身認めているように既定的命題が外置されている可能性のある例 (19a) があるので、あえて文末重心の原理に違反して文主語構文を使う理由がいまだ不明である。また叙述文というだけでは冒頭にあげた他の統語的操作と相入れないことを説明することは出来ない。

2. 文主語構文の情報構造と非名詞句主語

神尾 (1990) に日本語の文主語構文に関し、次のような記述がある。

……英語の Wh 分裂文の分布に類似しており、文主語はその内容とほとんど同じ内

容の文、もしくは密接に関連する文あるいは状況が存在している場合に自然に用いることが出来る。(神尾)

- (25)a. 社長が今頃部屋にいないのは変だ。
b. 弟が何もお役に立てなかったのは申し訳ないことです。

(25) は、談話の冒頭に用いられるとおかしい。

- (26) Hello Mrs. Jones - % What your daughter just swallowed was a radish.

Wh 分裂文も (26) が示すように先行文脈に関連あることがなければよくない。英語の文主語構文もこれらと同じ制約をうけている。

このような位置<文主語が現れる主語位置>は、通例、先行文の内容を引き継ぐような要素が生じ、文頭の‘that 節’はしばしば相手の発言を間接話法で引用していることが多い。
『現代英文法辞典』

中右がいう文主語の既定性は中右自身言っているように文内性質であるが、談話レベルで関連ある先行文脈があったほうが既定的になりやすいことは容易に想像できる。

ちなみに同じ談話上の制限をうける構文がもう1つ存在する。いわゆる「場所の副詞倒置構文」(locative inversion), 「be を越えての前置」(preposing around be) と呼ばれるものである。

- (27)a. More important has been the establishment of legal services.
b. In the ocean are whales, aren't there? 久保田
c. Sitting in the corner was my cousin Sarah. Stowell

いずれも談話の冒頭に用いることは出来なく、先行文脈とのつながりを示す要素が必要である。(27a) では *more* という比較級, (27b) では *in the ocean*, (27c) では *in the corner* が先行文脈とのつながりを保証している。

Wh 分裂文と (27) の倒置構文は情報構造に関しては (旧 (先行文脈と関連のあること) 一新) という無標の構造を持っていると言える。ここでようやく文主語構文を使う動機付けが与えられる。つまり無標の情報構造を保持するために、あえて文末重心の原理を犯してまでも文主語が現れるのである。(27) の文も無標の情報構造を守っていることに頼って通例名詞句である主語位置に名詞句以外のものが現れている構文と言える。

この構文は文主語構文と同じく疑問化出来ない。

- (28)a. *Has more important been the establishment of legal services?
b. *Are in the ocean whales?
c. *Was sitting in the corner my cousin Sarah?

同じく非名詞句が文頭に現れる Wh 分裂文も疑問文や感嘆文に出来ない。

- (29)a. What John is is tall.
b. *Is what John is tall?

c. *How tall what John is is!

3. 0 他の統語的操作に関する有標性

ここで、はじめにふれた文主語構文の他の統語的操作に関する有標性を説明する方向を探る。

3. 1 主語の名詞らしさ

久野(1973)で「表面主語節制約」が提案された。

The Constraint on Surface Subject Clauses: Surface subject clauses can appear only in sentence initial position.

この制約は表面的なフィルターの域を出ていない。しかし久野はまたこの制約が文主語の「節らしさ」(sentence-likeness)が文法性の違いに関与することを指摘している。(30), (31)は、主語位置にある要素の「節らしさ」が低くなれば疑問文の容認性が高まることを示している。

- (30)a. *Is that the world is round obvious?
 b.?*Is for you to do this necessary?
 c.??Is who is coming known?
 d. Is John's playing the piano annoying to you?

- (31)a. *How likely is that John will come?
 b.?*How important is for me to do this?
 c.??How important is who will win the election?
 d. How annoying was John's playing the piano?

久野の線を支持する証拠がある。文頭の位置には名詞句、節以外にも前置詞句が現れる場合がある。

- (32) Under the chair is a nice place for the cat to sleep. 有村

これを疑問文にしてみると ok である。

- (33) Is under the bed a warm place?

これは「節らしさ」のちょうど反対概念の「名詞らしさ」(nouniness)に関して前置詞句がかなり高い「名詞らしさ」を持つことの反映と考えられる。

3. 2 一見反例と思われるもの

- (34)a. Does that Fred lied to them bother all of the people who bought stock in his company?
 b. Does that the world is round bother as many people now as it did 500

years ago?

- c. Does that quarks have wings explain their odd behaviour?
- d. Does that quarks have wings explain anything at all?

Delahunty

(34) はすべてここでの議論の反例となり得る。しかし (34a), (34b) では述部が圧倒的に重いため外置構文が事実上閉ざされている例外的な文。別の言い方をすれば, 文主語構文において犯された「文末重心の原理」がこれらの疑問文では文主語と述部の相対的重さの逆転によりこれらの文を容認する原理として働いているとも言える。(35) も同様である。

- (35) Is that Bill knows German thoroughly so obvious to all that none of them are worried about his going to Germany alone? 安井編

また (34c), (34d) の例文は明らかに学術書に登場する文と考えられる。つまりこれらの文はむしろ (36) の文と等価なものとする。学術書では論理的可能性が追及される特殊な場合と言えるので, これらは文主語構文の疑問文の考察という観点からは例外とみなす。

- (36)a. Does the assumption that quarks have wings explain their odd behaviour?
- b. Does the hypothesis that quarks have wings explain anything at all?

3. 3 ま と め に

以上の考察から考えられることはつぎのことである。一般にある点において周辺的な構文が容認可能な文となるにはその周辺性を補うだけの原理なり要請なりがあると考えられる。文主語構文は主語が非名詞句であるという点と文末重心の原理に反しているという二点において周辺的な構文である。この周辺性を補っているのが情報構造上の要請である。文主語構文が疑問文になりにくいのは, 当該構文が依って立っていた情報構造上の要請が, 疑問文においてはその効力(つまり周辺性を補う効果)を充分発揮できないからと考えられる。疑問文は平叙文とは別の心的態度の表明であることがその要因と考えられる。無標の情報構造という支えを失ってしまえば, もともと持っていた周辺性, つまり非名詞句主語と文末重心の原理違反が前景化してくることになる。興味深いことにたとえ疑問文であっても主語の名詞らしさを保障したり相対的に文末重心の原理に従う形になればまた容認可能となることがおこりうる。疑問以外の操作もそれぞれ独自の心的態度の表明であるので, 同様の説明が可能と思われる。

* 本稿は, 日本英文学会北海道支部大会第38回大会(於北海道教育大学函館校)で口頭発表したものに加筆修正を施したものである。

References

- 荒木一雄・安井 稔編 1992. 『現代英文法辞典』三省堂.
 有村兼彬 1987. 「前置詞句主語について」『英語青年』133-1.
 Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
 Culicover, P.W. 1976. *Syntax*. New York: Academic press.

- Delahunty, G.P. 1983. "But sentential subjects do exit," *Linguistic Analysis* 12-4.
- Emonds, J.E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax*. New York: Academic press.
- Grosu, A. and S.A. Thompson. 1977. "Constraints on the distribution of NP clauses," *Language* 53-1.
- Hooper, J.B. 1975. "On assertive predicates," in Kimball ed. *Syntax and Semantics 4*. New York: Academic press.
- Hooper J.B. and S.A. Thompson. 1973. "On the applicability of root transformations," *Linguistic Inquiry* 4.
- 神尾昭雄 1990. 『情報のなわ張り理論』 大修館書店.
- Kiparsky, P. and C. Kiparsky. 1970. "Fact," in Steinberg and Jakobovits eds. *Semantics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Koster, J. 1978. "Why subject sentences don't exist," in S. Jay Keyser ed. *Recent Transformational Studies in European Languages*.
- 久保田正人 1981. 「主語の位置に生ずる名詞句以外の主要句範疇の機能と有標性」『英語学』24号.
- Kuno, Susumu. 1973. "Constraints on internal clauses and sentential subjects," *Linguistic Inquiry* 4.
- Marantz, A.P. 1979. "Assessing the X' convention: embedded sentences in English," ms., MIT.
- 中右 実 1983. 「文の構造と機能」 安井 稔他『意味論』大修館.
- Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rosenbaum, P.S. 1967. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge: MIT press.
- Stowell, T. 1981. *Origins of phrase structure*. Ph. D. diss. MIT.
- 高見健一 1993. 「語用論と統語論のインターフェイス」『英語青年』139-5.
- 安井 稔編 1987. 『(例解) 現代英文法事典』 大修館書店.